

しが国際協力親善大使レポート

はっとり くにひこ
服部 邦彦さん

隊次：2016年度3次隊

職種：コミュニティ開発

派遣国：ザンビア

自己紹介

服部 邦彦 26歳

明富中学校-草津東高等学校-立命館大学経済学部国際経済学科-大連外国語大学-商社(退社)-青年海外協力隊(2016年度3次隊)

活動している国、地域の気候や文化の紹介

活動国：ザンビア共和国(東部州シンダ郡農業事務所配属)

11月から5月が雨季(連日スコールのような一時的な雨が降ったり数週間降らないこともある)、6月から10月が乾季の気候をしています。雨量は年間650-900ミリ程度で米の栽培には少ない年が多い場所となっています。文化としては男性が腰みのを着用し、仮面をしながら太鼓のリズムに合わせて足で砂埃をおこし、女性と花一匁のように交互にかけあう「ニャオダンス」が東部州にあります。また野ネズミを食す文化があり、内臓を取り出し丸ごと塩ゆでして食べます。味はジャーキーを想像してもらえると分かりやすく貴重なタンパク源です。

活動や生活について

平日8:00-17:00 昼休み1時間が基本業務時間です。時間通りに勤務しているのは私しかいないといってもいいほど時間にルーズです。バイクに乗ってフィールドワークを主として行い、朝はデスクワークを少しして最初の同僚がくると外出し、夕方に戻ってくるというのが日々の日課です。活動範囲は中心地から半径25Kmで砂利の凸凹道のため、到着までに2時間要することもあるような悪路を使用することもあります。

業務内容は、5万人の農家を対象に米・ヒラタケ・改良かまど・ウォーターフィルターの普及と地元ラジオ放送局設営に向け、ピースコープとも連携を模索しながら展開しています。週一度程度ワークショップを開催し20-40名に対して普及を行っています。

1つの話で言うと、村長の家で食事をさせてもらうことがありますが、上下水設備などはもちろんなく川で洗濯しているため、白く濁りゲングロウが入った水を出されたこともあ

ります。飲むことはできませんがアフリカの人には普通にそのような水を飲んでいる現状に大変驚きを覚えました。とはいえ、歓迎してくれているからの対応であると思うことがたくさんあり、来てくれてありがとうといってもらうことも多く私の方こそ学ばせて頂いているので感謝することも多い毎日です。一番難しいことは「約束を守らないこと」です。1カ月前から準備をして当日を迎えても当事者が連絡なしに来ないし時間も平気で破り、謝りません。更に時間通りにできたことは一度もありません。ゆうに10回以上は何の連絡もなく頓挫しています。電波が届かないところにいるや携帯の電源が入っていないや葬式が非常に多いと理由も様々ではありますが、私はこのことを「思いやりに欠ける」と言っています。世界から称賛される日本人の思いやりの精神や勤勉さを改めて実感できていると思います。

生活に関して、地方でもネットは非常に遅いですができます。LINEでの通話は可能であり、停電は少なくとも週に数回数時間はありますが問題ない生活を送れています。外食は50円から300円であり、地鶏の炭火焼を主食のシマ（メイズの粉末をお湯で練って固めたもの）と食べるものは非常に美味しくごちそうとなっています。生活する上での最低限のものは購入可能なため今のところ苦にはなっていません。上手くいったためしはありませんが、それも含めての隊員生活と思いますし、帰国後はこの素晴らしい2年間の経験を地域に還元していきたいと切に思います。



農業イベントでのニャオダンス



村でのヒラタケワークショップ



村での米栽培



陸稲栽培のための準備風景



農業イベントでの風景

しが国際協力親善大使レポート

はっとり くにひこ
服部 邦彦さん

隊次：2016年度3次隊

職種：コミュニティ開発

派遣国：ザンビア

自己紹介

草津東高等学校普通科－立命館大学経済学部国際経済学科－商社退職後 青年海外協力隊（コミュニティ開発）に参加。

活動している国

サバナ気候であるザンビア共和国では11月－4月まで雨季で5月－10月までが乾季となります。気温は30度を超える日もありますが、総じて暑すぎることも寒すぎることもない生活しやすい環境です。道路が舗装されていない場所が多く、でこぼこな泥道を利用することが多く、距離もあるためバイクを利用しないと村へアクセスできません。民族舞踊には「ニャオダンス」があり足を箒のように振って、顔を隠しながら砂埃を起こします。

活動や生活について

ザンビア共和国東部州シンダ郡農業事務所にて、新規作物となる稲作やキノコの栽培を中心に様々な事に取り組みました。

2年間のワークショップ回数・参加農家数

ヒラタケのワークショップ	31回	725名
稲作のワークショップ	39回	592名
クッキングデモ	2回	55名
ロケットストーブワークショップ	19回	455名
ラジオ局開設ミーティング	9回	71名
炭作りワークショップ	17回	428名
養蜂箱ワークショップ	12回	357名
等		

2017年2月17日着任後、2019年1月9日離任までで計131回のワークショップ等を行い、計258.5時間・2691名の農家が参加するという結果となりました。要請に沿って、上記の普及活動を主にフィールドワークを通して農業普及員とともに行いました。活動2年

目からは教育した農家を講師として招き、現地語でのレクチャーやフォローアップを行い、技術移転がぬかりなく行えるように努めました。

事務所の予算の都合や農家との連携ミスによる失敗は全体の7~8割以上となる結果でしたが多くの方の協力の下、普及活動を行えました。広報活動では、ZANIS や NAIS といった広報機関に協力を依頼し稲作・キノコ・JICA に関しての広報活動を行いました。また、アメリカのボランティアとも協力して共同で活動しました。しかし、この2年間を通して、作物普及活動で継続が見込まれた農家は、稲作を除いて1割に満たない現状であったため、もう少しマネジメントに注力すべきだったと思っています。また例年、シンダ郡では雨量が少ないことが懸念されますが適地適作によるリスク回避や効率的な農業を行えるように支援を行いました。

ボランティア経験について

実務レベルは全く進歩しませんでした。自身の新たな経験の1つになったのは間違いのないと思っています。文化や言語の壁や宗教の違いなどですれ違うことが最初にはありましたが、今ではその違いを楽しめるようになったのはこの経験の賜物であったと思います。発展途上国での2年間は、彼らの生活や考え方を観察でき吸収できたこともあり、人間的に大きく成長できたのではないかとと思っています。帰国後は自身の経験を通して次世代に継承していきたいと考えており、多くの方に情報発信できればと思っています。

この2年間で自分が何かを教えるつもりで勇んで来ましたが、色々なこと(作物の栽培方法や身の回りの物で生活を向上する技術)をザンビア人から学ぶことになり、人の温かみに触れた2年間でした。今後は就農を予定していることもあり、ザンビアの方が教えてくれたことも参考にしながら色々なことに挑戦できることを考えると非常に楽しみです。



ワークショップ後の集合写真



養蜂箱ワークショップ



改良かまどワークショップ



中間報告会